

滝千春×安田芙充央 新プロジェクト発動！

満を持しての発動である。P140で対談企画を行なっているヴァイオリニストの滝千春さんと作曲家・ピアニストの安田芙充央さん、二人によるアルバム作品の制作プロジェクトがついにスタートした。レコーディングは25年11月と12月、かながわアートホールにて。現場に編集部が足を運んだ。

2台ピアノとヴァイオリンで表現される「生と死の狭間」

「アルバムのテーマは『生と死の狭間』とか、『生と死の幻想』とか、そういうイメージですね」と安田さん。

「具体的に挙げると、タイタニック号みたいな沈みゆく船の中に在って、海底で

奏でられるヴァイオリンの

音……それを表現した曲も

あったり。『メント・モリ』

という思いもあるかな」

その世界観を、「ものすごく

くアグレッシブでいてディープリー」(安田さん)

田さん) な滝さんのヴァイオリンと描いていく。

「彼女の音には常に限界を超えようとい



デュオを組むピアニストの藤原亜美さんとは今回が初共演の安田さん。「現代音楽に幅広く対応できるピアニストを探していて、知人からの紹介で知ったんですが、藤原さんはまさにプロフェッショナル。完璧です」と安田さんが話せば、「安田さんの曲は、美しいという感想がまず先に立つんですが、“楽譜から外れたところの世界”がすごく楽しいですね。音数が少ないところでも、“音符と音符の間にある何か”を想像させたり、行間を読ませるような深さを感じます」と藤原さん



2025年11月と12月、かながわアートホールで行なわれた滝千春さんと安田芙充央さんのレコーディング。訪問取材時は、ピアノ2台とヴァイオリンによるトリオ編成でのレコーディングが行なわれた



「滝さんにぜひ弾いてもらいたくて書こうと思っているんですよ」(安田さん)
「え、本当ですか! ぜひ、一緒にやりましょう!」(滝さん)
上記のやりとりを交わした本誌25年3月号から1年を待たずして共演が実現

う意志を感じます。リハーサルを重ねてお互いフィードバックしあって、さらに世界が深められていると思いますね」

一方、安田さんからスコアを受け取った滝さん。各楽曲から「安田さんがこれまでの歩みで大事にしてきたであろう、安田さんのなかの『弱い部分』への思いを感じ取ったという。「それを自身でハグする、そういうイメージに寄り添う感覚で弾いています」と滝さんは話す。

そして注目のポイントのひとつが「前代未聞かも」と安田さんも言う、2台のピアノにヴァイオリンという異色のトリオ編成で表現される楽曲だ。

「僕と藤原亜美さんのピアノに滝さんのヴァイオリンですが、最初は迷ったんですよ。この編成ではピアノの音量にヴァイオリンが負けるんじゃないか、と」

そんな安田さんの懸念を、滝さんのヴァ



ピアノ周りのマイクセッティング。2台のピアノともそれぞれ、ノイマンU 87 Aiを2本ずつ、ピアノのローエンド側にAKG C414をセット。加えてアンビエンス用マイクを立てる

ヴァイオリンのマイクセッティング。ノイマンU 87 Aiと、ステレオでセットされたDPA 4011。「最終的にどちらかを選択することになりますが、滝さんの過去の作品を聴いたところステレオで録られていて音像がよいものがいくつかあったので、それを狙ってみたいと思っていた」とエンジニアの梅岡さん



「アイオリンが飛び越えた。録音エンジニアの梅岡大志さんが証言する。『滝さんの音は出力が大きいんですよ。ピアノに負けない、ものすごい音圧です。エンジニアとしてミックス作業が楽しになりますね(笑)』」

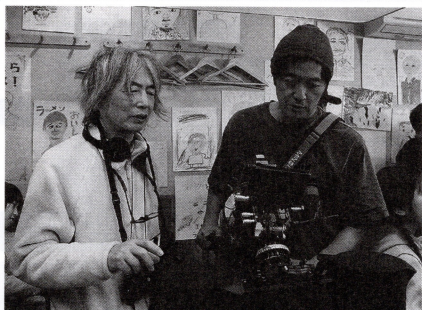
アルバムにはこのトリオ編成による楽曲を6曲収録予定。他は滝さん&安田さんのデュオ編成。オーディオ的な観点からも、『挑みたくなる作品』と言えるだろう。



写真右から安田美充央さん、作品の音楽プロデューサーを務める榎本憲男氏、滝千春さん、藤原亜美さん



初日に潜入！ 榎本氏が監督・脚本を手掛ける映画の撮影現場。詳細な報告は後日に譲るが、編集部は今後も注視を続けていく



「ひさびさに映画を撮ることになりました。今、撮影開始の2日前にこれを書いています。まあ、僕の場合はマイクロバジェットで3本撮ったあとで小説のほうにいてしまっていたので、映画に『復帰』とは言いがたく、ほとんどデビューみたいなのです。どんな映画かはまだ詳しく話せないのですが、通常の日本映画にはない、妙な感動を与えられる作品に仕上がればいいなと思っています。音楽はもちろん我が盟友の安田美充央。ラストクレジットに流れる音楽は、記事にある通りすでに滝千春、安田美充央、藤原亜美で録音しています。すくなくともこちらは大傑作です」(榎本憲男)

「滝さんの音は出力が大きいんですよ。ピアノに負けない、ものすごい音圧です。エンジニアとしてミックス作業が楽しになりますね(笑)」

と、レコーディングに立ち会った榎本氏。滝さんと安田さんのアルバムは2026年春にリリースを予定。そして榎本氏が監督を務める映画も2026年中の公開が予定されている。今後も双方の動向から目が離せない。

速報！ 密接に絡むもうひとつのプロジェクト

また、このアルバムにはもうひとつのプロジェクトが絡んでいる。作品がリリースされる「ブルクワ・レーベル」でプロデューサーを務め、本誌筆者としてお馴染みの小説家・榎本憲男氏が、監督と脚本を手掛ける映画制作プロジェクトがスタート。25年末にクランクインした。

映画の音楽を手がけるのは安田さんで、エンディングテーマも安田さん作曲の「スカイ・ラメント」。安田さんが24年にリリースした『SORA』に収録されているこの楽曲を、映画のためにピアノデュオとヴァイオリンの編成でアレンジし、前述のレコーディング時に録音が行なわれた。

「映画にはぜひこの曲を使いたいと、安田さんをお願いしたんです。僕の作品のテーマは、時に死とも重なるような、日常世界の向こう側」を想起せよとメッセージを発するもので、『スカイ・ラメント』はそこに合致する。しかも『ラメント(＝嘆き、悲しみ)』なのに、曲のベースラインは徐々に上昇して、どこか悲しみを帯びた高揚感が表されている。『悲しい高揚感』って矛盾しているんですけど(笑)、その世界観が合っているんですよ」